

青山地区の将来に向けて 市長ふれあいトーク資料



青山地区自治委員会

平成27年7月

1 現状と課題

(1)地勢と歴史

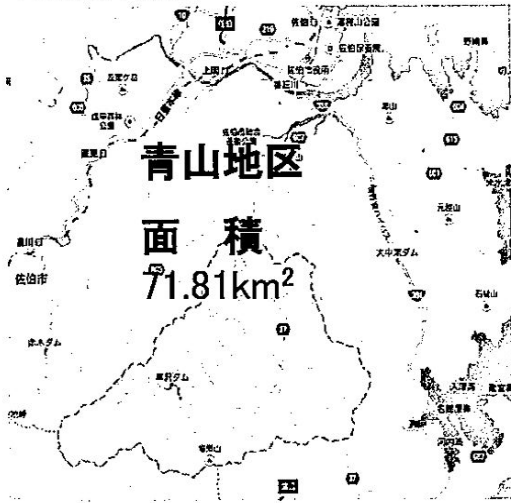


図-1 青山位置図

青山地区は、番匠川支流堅田川上流域に位置する場照山・石神越により宮崎県延岡市（旧北浦町）に接し、その殆んどを林野が占めている。

その青山地区を貫流する山口川・堅田川添い7地区に261世帯・629人が生活をしている。

かつて、青山地区は、米、麦を耕作し、桑を育てて養蚕を盛んにし、山の恵みによって木材・薪炭や椎茸等を生産しながら、豊富な山や川の資源にも恵まれて生活をしてきた。特に木材、薪炭の生産は、佐伯地域の基幹的な産業としての地位を築き、温暖な気候と相まって、青山人の人情と気質が形成され、産業、文化が発展

してきた。

しかしながら、国内の高度成長期に合わせ、農林業といった青山の基幹的な産業が不振となる一方、若者・壮年者等、ほとんどの者が都市部や佐伯市街地地区

年	人口(人)	世帯数	一戸当たり人口
明治24年	1,192	268	4.45
大正 9年	1,340	303	4.42
昭和25年	1,796	349	5.15
平成27年	629	261	2.41

表1 明治以降の人口

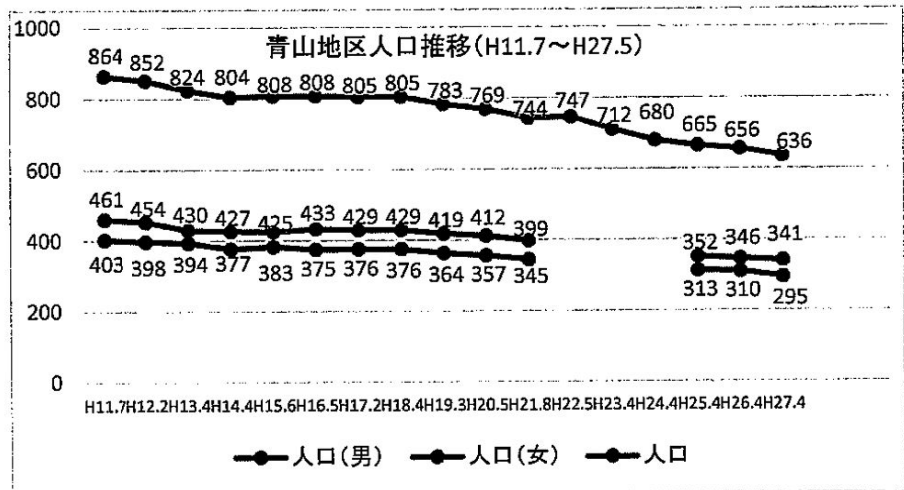
「青山の歴史」より

に職を求める状況になり、青山の各地区において、過疎化が顕著になってきている。

(2)人口

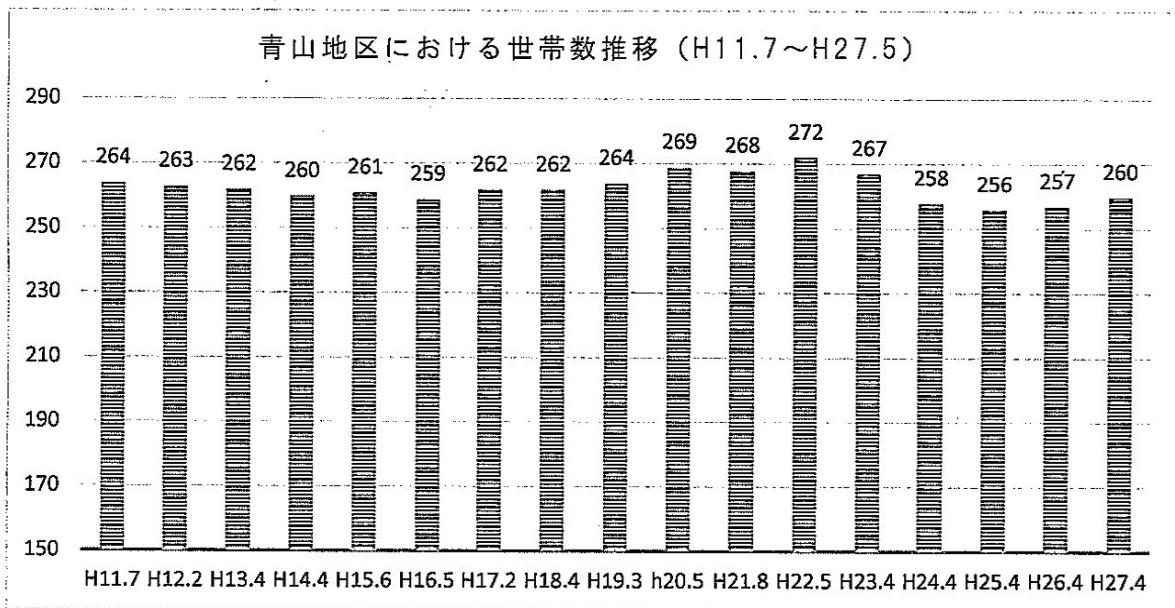
明治以降人口は、増加傾向を示し、終戦後の昭和25年には、1,796人を数えている。

その後、日本の高度成長期に合わせ、都市部へ人口流出が増大し、本地区は減少傾向になったと思われる。



世帯数は、昭和25年で約349戸となっており、現在より約100戸も多いが、明治24年には268戸となっており、現在とさほど変化していない。

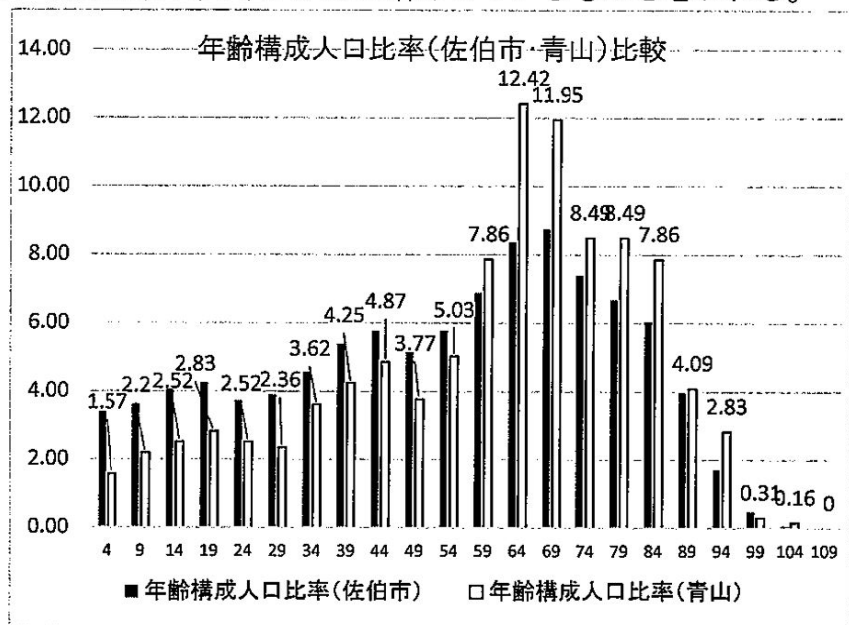
一戸当たりの人口は、2.41人/戸となっており、現在の核家族化傾向に示すとおり、昭和25年の5.15人/戸から半減している。



平成11年以降では平成27年までの間に人口は3/4になっており、約200人の減少となっている。戸数については殆ど増減がなく、1戸当たりの人口は、3.5人/戸から2.5/戸となっている。老人世帯、また独居老人等がかなり増加しているものと思われる。

現在、青山地区の65歳以上の人口比率は、44.18%となっており、佐伯市全体の35.12%より約10%高い数値となっている。

また、20歳未満の人口は、9.12%（佐伯市15.34%）となっている。このまま推移すれば25年後には、約350人を割りこむと推計される。



現在20歳から50歳の人口は、佐伯市全体と比較し、少なく、そのため、20歳未満人口も佐伯市全体と比べ比率が小さい。

また、現在、青山小学校の統廃合問題も出ており、小学校は、地域の拠点施設であることから統廃合の如何によっては、地域の一体性をどう保つか課題となってくると思われる。

(2) 交通

青山地区は、市中心部から15分、また堅田インターより5分（いずれも車で）の距離にあり、以前の市中心部より遠いといったイメージであったのが、県道37号線の改良により、大きく改善されている。

また、東九州自動車道の佐伯蒲江間が開通し、堅田インターの開設に伴い交通の利便性は、更に改善された。ただ、佐伯延岡間の無料化に伴い、県道佐伯蒲江線の交通量は激減しており、交流人口を如何に増加させるか今後の課題となっている。

(3) 防災

南海トラフの巨大地震に伴う佐伯市に押し寄せると予測される最大津波波高は、葛港で7.41mと言われているが、青山地区は、海拔20m以上であり、津波の影響は受けないと予想されている。

風水害では、過去に川井地区において田畑が浸水した例があるが、下流域のような家屋が浸水することは比較的少なかったようである。現在、時間当たり雨量が50mm超す雨が観測される例が全国的に頻度を増している。青山地区には、青山地区公民館及び青山小学校の2カ所（青山小学校体育館を除く）のほか4カ所が指定されているが、避難所までの距離が遠い地区もあり、避難が困難となる場合も想定される。

青山地区避難先一覧

施設名	所在地	避難所区分	収容人数	備考
青山小学校（校舎）	大字青山2691番地1	風水害・地震津波	310	市職員配置
青山地区公民館	大字青山5463番地1	風水害	50	市職員配置
谷川地区林業集会センター	大字青山2212番地	地震津波	20	
臨川庵	大字青山1712番地	風水害	10	
黒沢生活改善センター	大字青山4740番地1	風水害・地震津波	40	
富尾神社	大字青山3017番地1	風水害	12	

(4) 農林業

農林業は、青山地区の根幹をなす産業である。現在、遊休農地や耕作放棄地は、あまり多くはないが、担い手の如何によっては、今後遊休農地が増大していくことが懸念される。

林業経営は今後も厳しい環境におかれている状況にあり、更なる効率的経営を促進し、担い手を育成していくことがこれからの課題と言える。

(5) 福祉

青山地区においても一戸当たりの人口は、2.41人となっており、少子高齢化に加えて、核家族化の進行や、個々の価値観の多様化等により、地域のつながりが希薄化の進行等、社会のあり方も変わってきている。

また、高齢者世帯、独居老人等も多くなっており、今後、更に増えていくことが予測される。

(6) 教育

現在、教育委員会は、青山小学校を下堅田小学校へ統合という案が出ている。

青山小学校は、地域の拠点施設として存立しているが、児童数の減少は否めない。今後の推移を見守り、少子化対策、児童数の増加対策、或いは、地域の拠り所、地域の一体感を如何に構築して行くか考えていく必要がある。

児童数の現状と推計（青山小学校）

H27.5.31現在

年度	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	備考
27	2	2	3	3	4	6	20	2複式
28	3	2	2	3	3	4	17	2複式
29	1	3	2	2	3	3	14	2複式
30	4	1	3	2	2	3	15	2複式
31	3	4	1	3	2	2	15	2複式
32	2	3	4	1	3	2	15	2複式
33	1	2	3	4	1	3	14	2複式



富尾神社祭典・杖踊りの奉納(青山小児童)

また、青山地区公民館は、生涯教育としての場であるが、老朽化が著しく施設収容人数も少ない。

現在、生涯学習の場としての機能が不足、或は利用しづらい等により利用者は少ない。今後、壮年者・高齢者にとっての生涯学習の場としての利用促進、また地区にとって必要なことは何か検討していかねばならない。

2 地域づくりの基本方針

青山地区は「一に市福所、二に仁田原…」というように美味しい米の産地である。清流堅田川・山口川、青々とした山々、この恵まれた自然を活かし、魅力ある地域形成をめざす。

3 事業等の方向性

青山地区は、東九州自動車（佐伯IC・蒲江IC）の開通により、交通の便は、大いに良くなった反面、佐伯延岡間は無料区間であるため、県道37号線（佐伯-蒲江線）の交通量は、激減している。

また、青山地区には、医療・福祉施設、コンビニや商店といった生活を維持していくための施設もなく、超高齢化が進む中、将来、地区の消滅といったことも考えられる。

そのため、地域の生き残り、さらに人口が減少しても生活できることを検討して行く必要がある。

現在、地域の拠点施設として、青山小学校、青山地区公民館が立地しているが、中でも青山地区公民館は、老朽化し、地域の拠点施設としての機能は不十分と言わざるを得ない。

今後、青山地区が生き残っていくためには青山地区公民館は、社会福祉、高齢者福祉としての機能、商店やコンビニといった商業施設、地域から観光、物品等の情報発信の

機能、また本来の生涯教育としての機能を併せ持つ複合的な施設でなくてはならない。

商業施設の運営は、青山地区のみではとても採算が合わないため、域外からの顧客をつかむ必要があり、往来のない県道37号線からの顧客ではなく、東九州道から乗り入れ可能な「道の駅」形式の商業施設でなければならない。

そういったことで、青山の溢れる自然、歴史、美味しい青山米や餅等、域外に向け、アピールする。青山地区の存亡をかけた施設づくりとする必要がある。

今後、生き残っていく地域づくりのためには、行政だけではなく地域でできることは地域自らの住民で創意工夫し、助け合いながら「地域をよくしていこう」と努力をして行くことが肝要である。

そのために、まず、地域づくりに真剣に考える実行組織を作り、その都度問題点等を洗い出し、市と連携しながら、より良い方向性をめざす。

また、その進行管理については、P D C Aサイクルで進行管理を行う。

P (Plan) : 計画 D (Do) : 実行 C (Check) : 監視・測定 A(Action):見直し

主要な取組み(主要な事業等の方向性)

(1) 自然環境

- ① 黒沢ダムの湖底にヘドロが堆積し川の水質が悪化していると懸念される。ヘドロの除去について行政機関に要望し、きれいな川を取り戻す。

(2) 居住者の増加対策

- ① 空き家の提供者を探し、定住希望者を募って紹介し、定住を促す。
- ② 行政や不動産業者等に住宅の建設を要望する。

(3) 農林業

- ① 農地の利用については、農地中間管理事業を活用し農地の集積を図るほか、担い手の組織をつくり、事業に乗らない農地についても耕作放棄地解消を図るため農地の貸し借りを推進する。

また、青山の米農家で作る「唐変木の会」は毎年、青山産の米を使った焼酎に取り組んでおり、需要は多く、すぐに完売する状況である。

今後、需要の状況を見て、「唐変木」の生産量の増加、また「青山米」のブランド化に努め、付加価値を高めるとともに、内外に情報発信をしていく。

- ② 林業については、現在、杉苗等が不足しており、他県から購入するケースも発生している。そのため、かなりの本数が必要なことから青山地区で杉苗育成圃場を整備し、一大産地とする。

林業の荒廃は、山のみならず全ての自然に影響を与え、地球温暖化対策も含めた自然環境の荒廃に繋がる。そのため、山林を主体とした環境保護の拠点と位置づけバイオマス、環境教育の場としたい。

(4) 自然の保全・伝統芸能の継承

- ① 地域の史跡・巨樹・希少種等を洗い出し、青山の魅力の発信に努め、交流人口

の増加を図る。

(三つ梅、富尾神社、馬鎮神社、三軒屋の大杉、場照山の自然(トサムラサキ)、東光庵の塩釜桜、市福所遺跡、監視廠)等

- ② 富尾神社の神踊り・杖踊り、山口・谷川地区の盆踊りなどの伝統芸能の保存継承に務める。
- ③ 青山地域の魅力・催しごと・自然等を青山地区内外に向けた情報発信を行う。また、地域の魅力等の再発見(地域内での組織を設置)



東光庵「塩釜桜」

青山地区は、古来より大衆演劇が盛んであり、現在でも「とんぼ劇団」・「劇団シルバー青山」等が活躍している。佐伯市の他地域にはあまりないことから保存・継承に努め、将来に繋げていく。

また、盆踊りについても他の地域では見られない小太鼓・三味線の伴奏で踊る優雅な踊りである。

踊りは上方の流れを汲んでおり、詳しいことは、不明であるがかなりの歴史があると思われる。

(5) コミュニティ活動

- ① 地区内での祭り(現「海んし・山んし・青山んしふれあいサミット」)を開催し、地域一体化の推進を図る。



海んし山んし青山んしふれあいサミットより

(6) 地域の拠点施設

- ① 地域の拠点である小学校の統合については、統合に至るまでの間は、児童数の増大に努め、地域の拠点として、子育て支援、小学校や保護者への支援に努める。

- ② 青山地区公民館は、お茶の間事業施設や高齢者等のスポーツ場、また店舗を兼ね備えた複合施設とし、地区住民が何時でも利用しやすい施設を整備し、住民の交流の場とする。



青山小学校全景

(生涯教育施設・福祉施設・道の駅の機能を兼ね備えた施設整備)

(7) 魅力ある地域づくり

- ① 信頼しあい、温かな心通う地域づくりの更なる実現をめざし、地域の皆が「信頼し合う」、「褒め合い運動」を進めていく。

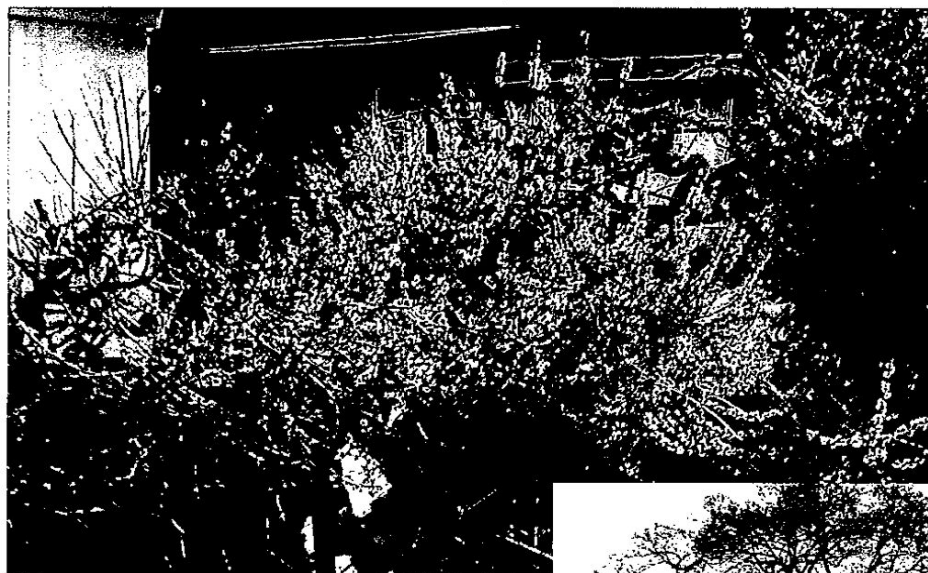
(8) 道の駅

東九州自動車道から降りることができる「道の駅」を整備し、交流拠点また、商店のない青山地区住民の生活必需品の購入の拠点とする。「道の駅」は、青山地区の製品の販売、地域の観光等により、地域の活性化につなげる。

「道の駅」は、前記「地域の拠点施設・青山地区公民館」等の機能を備えた施設として、地区民また地区外も含めた交流拠点とする。



清流堅田川(大通り)



三つ梅〔高瀬精市さん所有〕（棚野）



棕の巨木（山口）

手まり唄（佐伯市青山）

☆一に市福所 二に仁田原 三に西野の千代鶴さま 四は城下の瓦焼き

五つ池田の蓮の花 六つ筵のもみ畑 七つ波越の蛙の田 八つ山田の三軒屋

九で黒沢の船ヶ下 十で壺尾の権現様